

福島県史第2巻（福島県編）

蒲生氏郷（高橋富雄）

近江日野町志（滋賀県日野町教育会編）

近江蒲生郡志（滋賀県蒲生郡役所）

伊達政宗卿（藩祖伊達政宗公三百年祭協賛会編）

115 楽兵隊の隊名が額兵隊となったのは

問 「仙台戊辰史」（藤原相之助）の中で、楽兵隊の名称が1回書かれた後、直ぐ額兵隊と隊名が変わっています。何の理由によるものか、全然記されていません。何時、誰が、何故改称したのですか。

答 東西対決が決定的となった慶応4年閏4月、伊達家の若年寄葦名鞠負〔ゆきえ〕が、脆弱な仙台の軍事力に活を入れるため、その中核たるべき精鋭部隊の錬成を急務とし、奉行松本要人〔かなめ〕に進言して創設したのが「楽兵隊」でした。隊員には、但木土佐の訓練していた手兵から、幹部候補生として100人を選抜して充当し、新式の西洋軍鼓打法を修得した楽兵〔軍楽兵〕を所属させ教育訓練に軍楽を利用したことから、「楽兵隊」と称したのであります。かねてから、横浜でウェンリードについて兵学砲術を学んでいた傑物星恂太郎が、この西洋式軍隊の指導を命ぜられました。翌5月恂太郎が新潟出張を余儀なくされたため、一時低調期があったが、帰任後司令に任ぜられた星は、早急にその拡張強化を断行しました。忠誠勇武な800余人を以て、砲兵150人、工兵200人、その他を楽兵及び士官隊に編成し、英国式の赤の軍服を制定し、新鋭の兵器を導入し、総員寸刻を惜んで日夜猛訓に猛訓を重ねたのでした。こうして、精強無比ともいうべき部隊が、短期間のうちに錬成されました。隊名を「額兵隊」と改めるのは、星が新潟から帰り、司令となった際の様子です。「星恂太郎碑」（大槻文彦撰）に『…請磐溪名額兵隊……』とある通り、星の為に大槻磐溪の命名したものです。この碑文を引いて「仙台額兵隊記」（片平六左）は『恂太郎は新潟から帰り藩士の中から家長及び長男を除いた次、三男で30才以下の敢死の者を募って約8百人、磐溪に請うて名を額兵隊と改め……』と記しています。「仙台戊辰史」は改名のことには全然触れておらず、その他の諸書も同様で、中に『はじめ「楽兵隊」といったのがのちに「額兵隊」と称した』とか、『恂太郎が教師になってから、隊名を「額兵隊」と改めたのである』と書いたものが見られるだけです。

磐溪が与えた「額兵隊」の名は「楽兵隊」と同音を選び、隣国清朝の正規軍「額兵」の称をとったものであります。「額兵」とは、定数の兵、すなわち正規軍の意味で、八旗と緑營の兵を総称し

ます。清朝護持を以て任ずる正規軍の名をとって、仙台護持を担うべき精鋭部隊の名としたことには、深い意義と大きな期待がこめられていることがうかがえます。果たせるかな「仙台戊辰物語」（橋本虎之介）の『近衛兵ともいうべき精鋭軍隊・額兵隊』、「南摩綱紀〔なんまつねのり〕筆記」の『額兵隊（皆英式を学ぶ）、仙台第一の熟練強精兵』という評価を受けるにふさわしい隊名の選定でありました。特にこれらのことについて述べてある図書も記録等もありません。当時漢字の教養が全般的に高かったため「額兵」の語の如き、格別取り立てて説明するまでもなかったのも、文書・記録に残されなかったと考えられます。

なお、「額兵隊」の精強さは、仙台側の降伏によって未発に終わりました。その後、榎本武揚の率いる旧幕軍に合流し、明治元年10月石巻から開陽・回天の2艦に便乗して、箱館へと転進して行きました。そして翌明治2年夏にかけて、維新決戦の最後を、最も果敢に、目ざましく飾ることになります。「額兵隊」のことについては、仙台は勿論北海道の多数の資料をふまえて書き上げられたものに「仙台額兵隊記」（片平六左）があります。

注(1) 葦名盛景〔もりかげ〕伊達家の準一家。登米郡石越に1千石の知行を与えられていた。字は子行、通称繁太郎、豊前・靱負・芦洲また晩翠山房と号し、晩年に雪江と改めた。佐渡盛長の次男。小姓頭、若年寄兼大番頭、養賢堂御用掛等の要職を歴任した。戊辰有事の際は内外の要務に当り、また精鋭額兵隊の生みの親となった。明治10年西南役には三等警部として出征した。後、伊達家の家扶となり忠勤の人と称せられた。明治29年3月19日東京芝邸で歿した、享年58、石越昌覚寺に葬る。

注(2) 代々着座の家柄で、諱は成章、要人と称し、遠田郡休塚（富永村）に1,400石の知行地を与えられていた。戊辰の際奉行に挙げられ、盛んに佐幕論を唱え西軍に抗した。国論一変の後、反逆首謀の罪を以て補吏をさし向けられ、自決しようとしたが、その妻の諫めで逃亡した。箱館に潜行して榎本武揚の軍に投じたが、放縦甚しく軍紀を乱すとして放逐された。江戸に潜入したところ、遠藤文七郎のため捕えられ投獄された。間もなく王政復古大赦によって放免、郷里休塚に帰った。明治5年官立宮城師範学校に学び、馬放小学校校長となった。明治26年77才で歿した、休塚茂林寺に葬る。

注(3) 諱は成行、七峰樵夫と号す。宿老の家柄で、黒川郡吉岡に1,500石の知行を与えられていた。幕末、領内が攘夷論と開国論とに分裂したとき、開国佐幕派の指導者として藩論をまとめた。慶応3年〔1867〕君命によって上洛中、王政復古の号令に際し、翌年会津討伐の朝命を受けて帰仙する。しかし土佐はその後、佐幕派のリーダーとして奥羽越31藩軍事同盟を成立させ、西軍との抗戦を指導した。戦局振わず、遂に降伏に終って、土佐は戦犯者として身柄を東京に送られた。明治2年5月19日、同僚の坂英力とともに麻布仙台屋敷に於て斬罪に処せられた。時に年53。芝高輪東禅寺に葬る。その家中を以て洋式軍隊を組織し、装備・訓練の優秀さは、藩中第一と称せられた。楽兵隊創設のと

き、その要員は、この但木隊から選抜されたのである。

注④ 「高橋是清自伝」(高橋是清)に『同じく仙台藩士で星恂太郎という人が、英国兵式修業のために横浜へ出ていた。……当時は衣食のために、ヴァンリードというアメリカ商人の店に働いておった。この店は各藩に鉄砲や何かを売込んでおったが、星氏はその手伝いをしながら、傍ら英式の兵学を研究しておった。』とある。

注⑤ 「星恂太郎碑」〔仙台市榴岡天満宮境内に建つ〕の碑文にその履歴がよく記されている。すなわち、

「星恂太郎碑

海軍中将農商務大臣正二位勲二等榎本武揚題額

仙台藩祀東照宮公供祠務者六戸曰六供掌點茶事星氏其一也恂太郎君以天保十一年十月四日生父名道榮母洞口氏君為人短小精悍有胆氣好武技不屑茶儀慷慨詭激動輒以氣凌人人罵其狂君曰人言當矣因自名曰忠狂時外事日逼攘夷開國分党相鬪藩老但木士佐儒臣大槻磐溪專主開國君怒曰是國之蠹也與同志士金成善左等謀刺之磐溪喻以海外大勢君大悔悟遂脫走江戸時士佐在江戸藩士富田鉄之助以義俠聞一夕抵土佐索數金士佐問將何用曰恂太郎來投我彼材可用請資而遣之士佐笑曰吾子亦鮮人也乃投以十數金於是君志遊四方與志士交遂就米國人於横浜講究洋兵學就久世侯林祭酒並聘教練其家兵戊辰變起士佐徵君趁急君踊躍曰其以償前罪矣乃馳還獻計募藩士少壯千許人請磐溪名額兵隊教練四月而成八月擢大番組士班賜俸百七十石時四境告急藩促出兵君曰吾兵屢敗以糧餉彈藥不備也乃百方蒐集發有日矣會士佐見斥奧羽同盟瓦解藩論一變君憤慨曰一戰而克猶不足挽頽勢耶乃揭檄於市不告而發進到槻木驛時九月十五日也藩主人驚親馳止之君不得已還屯宮床村伺動勢時幕府海軍將榎本武揚率艦隊泊松島派將走函館使人招君君遂以隊兵投之乃謂部下曰欲去者去奮請從者二百五十人十月從武揚至磐木尋破川波嶺陷松前城額兵隊每戰有功明年四月西軍大舉來討海陸鏖戰兩軍死傷無算武揚擢五稜郭戰酣西軍餉以酒衆疑不飲君笑曰吾輩命在旦夕彼豈毒我乃大釀數椀曰美酒美酒既而西軍諭降武揚會諸將議曰孤軍難支不若吾輩就誅免我衆五月十八日終降君幽弘前藩三年六月見積仍留在北海道從拓殖事尋出仕開拓使進樞大主典四年六月移家於岩内製塩場六年辭官客遊上國謀興業九年七月二十七日病歿於仙台三十七葬北郊萬日堂(下略)

明治二十九年十二月

大槻文彦 撰文 大内青巒 書丹

〔仙台市史〕第5卷等の採録には誤記が多いので、碑文により正した。〕

碑文中の「久世侯」とは下総国関宿〔現千葉県東葛飾郡〕に封ぜられていた譜代大名5万8千石。第1、2、4、7代の当主が老中に補せられた。また林祭酒〔祭酒とは大学頭の唐名〕について「史料徳川幕府の制度」(小野清)に『林家〔祭酒〕は禄三千石、乗馬二頭を邸内に飼い、日々乗馬にて柳宮〔幕府〕へ出勤して、枢機に参与し、且つ軍役歩兵一

小隊四分の一を邸内にて養い、子〔小野清は慶応2年〔1866〕林大学頭へ入門〕が同郷星恂太郎（後の仙台藩額兵隊長）、菅原隼太（額兵分隊長）、竹内集（同上）邸内の馬場に於て日々これを練る。固より尋常一様の儒者にあらず。』と記してある。

注(6) 当時の人々は軍服の色により、英国兵を赤隊、仏蘭西兵を青隊と呼んでいた。

注(7) 八旗と緑營の兵。

注(8) 清の太祖の定めた兵制。清朝創業の際に功劳のあった者の子孫を以て組織した兵。その満洲人から成るものを満軍八旗、蒙古人から成るものを蒙古八旗、漢人から成るものを漢軍八旗と称し、合計24旗30万と号した。八旗とはその軍旗の色から区別したもので、鑲黄〔じょうおう。黄地紅辺〕・正黄〔純黄〕・正白〔純白〕を上三旗、鑲白〔白地紅辺〕・正紅〔純紅〕・鑲紅〔紅地白辺〕・正藍〔純藍〕・鑲藍〔藍地紅辺〕を下五旗という。

注(9) 清代、各省で招募した漢人を以て組織した軍隊。その旗幟が緑色であったのでこの名が生れた。

注(10) 字は士張、羽峯と号す。会津松平家の家臣、幼時藩校に学び、やがて江戸昌平校に進学し、傍ら洋書を杉田成卿に学んだ。維新後、太政官・文部省に勤務、漢学を以て高等師範学校教授となった。明治42年歿、87才。

注(11) また箱立とも表記したが、明治2年旧幕軍制圧後新政府は函館と改称した。

資料 大漢和辞典第12巻（諸橋轍次）

仙台額兵隊記（片平六左）

116 「すず」とは何か

問 「佐々木喜善の昔話」に『……一個の御酒錫（おみきすず）と小なさ箒をもらった。権現様の言(1)うことには、この御酒錫は(2)いくら酒をついでもつぎきらぬ錫……』とあります。「すず」とはどんなものですか。

答 「すず」とは、酒を入れる徳利のような容器で、昔は陶製のもの(3)がなく、すべて錫製だったのでこのように呼ばれます。もとは、れっきとした中央語(4)でしたが、徳利とか、銚子とか、チロリの語(5)に押されてか、次第に方言として残存するだけになってしまいました。

「すず」についての図書資料には、次の諸書があります。

1. 「全国方言辞典」（東条 操編）

『すず